

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のおんな』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 17 回のツイキャス読書会の課題図書は、谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のおんな』です。

[朗読はこちら](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

『猫をめぐる冒険あるいは、怒りの福子ロード』

この小説を読んで思ったのは、やはり女の人の思考は、単純な男よりも賢いし、怖いなど。

品子にとっては、福子が現れて、庄造と家を奪われ、福子にとっては、品子の手紙のタイミングがとても悪かった。

庄造にとっては、最大の急所のリリーを奪われてしまう。

おりんは中立だけど、福子に息子のことで怒られてしまう。

全ての悲劇の始まりである手紙は、庄造が猫のリリーを、奥さんより好きすぎたのがそもそもの原因だと思いました。

故に、女性はみな猫のリリーに嫉妬する。

猫のリリーに会いたさに、前妻の品子の住んでいる初子の家に行く冒険をしてしまった庄造。

それと引き替えに、怒りの形相で待ち構えている福子がいる家に帰る庄造に未来はあるのか。

ナカタ老人(from 海辺のカフカ)に、リリーが庄造についてどう思っているのか聞いてほしいとも思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『 猫と庄造と二人のおんな 』 感想 ～思惑～

私は、現在猫を二匹飼っている。もう八年くらい一緒にいる。その前の猫は、十七歳で亡くなった。だからこそ、この小説を読んで、猫の習性と人間の思惑との絡み方がとてもリアルに感じた。本能のままに自分の生存しか興味がない猫に対して、都合のいいように自らの思いを猫に投影する人間たちが、とても滑稽でもあり、なんだか愛しかった。それは、返す刀で私自身の姿でもあるのだろう。

群生動物で愛情深く友好的だとされる犬と違い、猫は単独生活でテリトリーを大事にする。「犬は人につくが猫は家につく」といわれる所以だ。庄造はそんな猫の性質を知ってか知らずか、尼ヶ崎から戻ってきたリリーに愛情を感じてしまう。品子と福子、母親まで加わって、女性同士のいざこざに疲弊していた庄造は、逃げ場という名の拠り所をリリーに求めてしまう。

品子のリリーを譲り受けた気持ちは、まさに「思惑」だけでリリーを見ていない。その向こう側の庄造を見ているだけだ。その品子の行動で、思い出すことがあった。

私の知人女性が、ある男性にこっぴどく振られた。すると、その女性がとった行動は、その男性の母親と仲良くすることだった。息子の元彼女ではなく、友人と思わせるところまで頑張った。男性が他の女性と結婚しても、その関係は続いた。失恋を癒すために、男性の一番身近な人間に近づいたのだ。母親はそんな思惑があるとは気づかずに、「いい子だわあ。」と仲良くしていたらしい。その関係が終わったのは、彼女自身が他の男性と結婚した時だった。彼女も母親の向こう側の男性しか見ていなかったのだ。

女性の思考や行動に、今昔はないらしい。

そんな品子も、庄造と同じく、猫の性質にやられてしまう。猫は暖かい場所を好むので、毎夜布団に潜り込んでくるところとか、何日か平気で家を空けた後に戻ってくるとか・・・。品子も少しずつ癒されて、リリーに傾倒していた庄造の気持ちまで、慮れるようになる。

この小説で、何も変わらないのはリリーだけだ。状況に合わせて「生きて」いるだけだ。その小動物に対して、人間の行動の不可思議さ・・・。それこそが人間の「愛す」べきところなのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『品子の献身』

私は、この小説に出てくる品子に深く同情してしまった。

実は元亭主からはとっくに愛想を尽かされているのに、品子はそのことに気付いていない。心の中で、庄造がいつかきつとりリーの延長にいる自分に気持ちを振り向けてくれる、自分を憐れむ気持ちになってくれる、願わくばそれが発展して庄造と復縁できる、という淡い期待にすがって生きている。

そんな時に、品子はりリーを手に入れた。最初から可愛がるつもりもなかったのに、あんなに恨んでいた猫がなぜか自分に懐いてくれる。意中の人を手にした様な充足感に満たされる品子。

私は、りリーに出会うまで品子が、自分がいったいどんな人間なのかまるで客観視できていなかった事に、イタい気持ちになった。品子はおりんやいろいろな人から強情と言われていたのが、いつの間にか自分の自己評価になっていたようだ。それ以前の品子は、夫に献身していたから自己評価なんてどうでもよかったのかも知れない。そんなふうに、女性にとって誰かに献身して自分を見失っている状態がある意味女性の「充実期」であると考えれば、品子にとって庄造との日々はそれなりに満たされていたのだと思う。

しかし、この先も庄造は福子から離れることはきっとできないだろうと私は思うし、品子がりリー亡きあと再びあらたな献身対象を見つけて、充実した日々を送れるかどうかも未知数だ。

女性は自分が定めた献身先如何で、人生が決まると言い切ってしまうのではないかと私は思う。意義や理屈では生きていけない。福子もおりんも同様なのだと感じる。そして私自身もそれは同じだ。人間相手が無理なら品子のように動物とのノンバーバルコミュニケーションでも、献身先がないより精神的な安定が保てるように思う。

最後に…。献身相手をどうしても束縛してしまう品子や福子の姿がイタかった。そのさまがこの小説には生々しく描かれていて、一番ドキッとさせられた部分だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『猫と庄造と二人のおんな』感想文

リリーは愛される方法を知っている。私はそう感じました。

最初はリリーばかり可愛がっている庄造に腹が立ちました。動物と奥さんのどちらが大切なのか！リリーがそんなに大切なら品子も福子も必要ないのでは？リリーだけが居ればいいのではないかと腹立たしかった。

私は動物を飼った事がなく、人間以外のものに愛情を注いだこともなかったので、庄造の気持ちは理解できませんし、私もし品子や福子の立場なら間違いなく嫉妬してリリーの事を憎らしく思ったと思う。

でも、品子は最初リリーを庄造を取り戻すための手段として考えていたがやがてリリーの身の上を自分の身の上に重ね合わせるにより少しずつリリーを愛おしいと思えるようになって、リリーが悪いのではなく自分が庄造に、対してもリリーに対しても愛情を注いでこなかった事も芦屋の家を追い出される理由のひとつになっていた事に気づけて良かったと思う。

家を追い出されて淋しい思いをしている事を誰かのせいにしてたり、何かのせいにしてしまっただけでは原因が見つからないままさらに苦しくて同じことを繰り返してしまうのかもしれない。

愛される方法を知っているリリーは、最初は嫌っていた品子でさえも虜にしてしまうのは、ただ猫ではない！（ただ者ではない）と感じました。猫や動物が苦手な私でも虜になってしまうかもしれない。

ただ、分からないのは、品子が庄造にそこまでこだわる理由です。

優しい所もあると思うけど、人がよさそうで、ずうずうしい、男としても頼りない庄造の良さが分かりませんでした。

品子のプライドがそうさせるのか…。

品子の企みは残念ながら成功する確率はすごく低そう。リリーが居れば楽しく暮らして行けそうなので、庄造の事など断ち切って欲しいと思うのは私の希望です。

(おわり)

『きょう、ママが死んだ』

(引用はじめ)

「お母さん、ちょっと頼みがありまんねん。——」

毎朝別に炊いている土鍋のご飯の、お粥のように柔らかいのがすっかり冷えてしまったのを茶碗に盛って、塩昆布に載せて食べている母親は、お膳の上へ背を丸々と蔽いかぶさるようにしていた。

(引用おわり)

私は小学生の頃『たはむれに母を背負いてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず』という石川啄木の短歌を読んで、感動して泣いたことがある。しかし、大学生の時、テネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』という戯曲を読んで、主人公が、気位の高い母と、足の悪い姉の束縛に耐えられず家出してしまう結末のリアリティに納得した。啄木の詩の奥底には、日本の母への怖れが滲んでいるかもしれない。

庄造の母、おりんは、『いつでも結局この倅を思い通りに動かしてる』のだ。品子が追い出されたのも、福子が嫁いできたのも、おりんの計略があったからである。おりんは、老醜と妄執を悟られないために、塩昆布でおかゆのようなご飯を食べて、家の片隅に申し訳なさそうに生きているふりをしているが、その実は、この家を支配している。しっかりした品子より、家産があって、だらしない姪の福子のほうが、自分には都合がいい。福子を近所の風よけにして、庄造を頼りない家長にしておくことで、おりんは、いつまでも奥の院に君臨するのだ。怖ろしいことだ。

母と福子の束縛に嫌気がさして、ヤケになって自転車を乗り回し、リリーに会いたくなって、空き地に佇む庄造は、哀れだった。

(引用はじめ)

庄造は、母親からも女房からも自分が子供扱いされ、一本立ち出来ない低能児のように見做されるのが、非常に不服なのであるが、さればと云ってその不服を聴いてくれる友達もなく、悶々の情を胸の中に納めていると、なんとなく独りぼっちな、頼りない感じが湧いてくるので、そのために尚リリーを愛していたのである。

(引用おわり)

「息子はその母親の子どもであることだけで充分償っている。」(安岡章太郎『海辺の光景』)

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>